

五木寛之

蒼ざめた馬を見よ



蒼ざめた 馬を見よ 五木寛之

文藝春秋刊



著者略歴

昭和7年、福岡県八女市生れ。32年早大露文科中退。業界紙の編集、コピライター、CMソングや子供の歌の作者などを経て作家となる。『蒼ざめた馬を見よ』で第56回直木賞を受賞。現住所：東京都北区荒原台町3-16 同業社 〆004



蒼ざめた馬を見よ

昭和四十二年四月十五日 第一刷
昭和四十六年五月三十日 第二十一刷

定価四二〇円

著者 五木寛之

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

印刷所 大日本印刷
製本所 加藤製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

0093-300190-7384

目次

蒼ざめた馬を見よ
3

夏の怖れ
87

赤い広場の女
123

吊いのバード
147

天使の墓場
183

装
幀
片
岡
真
太
郎

蒼ざめた馬を見よ

1

その部屋にいるのは、三人だけだった。

Q新聞論説主幹の森村洋一郎、同じ社の花田外信部長、そして外信部記者、鷹野隆介の三人である。

Q新聞東京本社七階の、この特別応接室は贅沢なホテルの一室に似ていた。Q新聞に入社して十年ちかくたつ鷹野も、この部屋にはいったのは、今日がはじめてだった。靴の下には、ベージュの上質のカーペットの吸いこまれるような感触がある。磨きあげられたガラス壁面を通して、初夏の切れ味のよい日射しが降りそそいでいた。目の下の西銀座の雑踏が別世界のようにだ。密閉された部屋の中はひどく静かだった。快適な室温と、ゆったりとした空間。パイプ煙草の匂いとゴムの木。

「組合のほうは相変らず忙しいのですか」

と森村論説主幹が、鷹野に向って微笑しながらきいた。国立大学の教授か、アカデミックな美術評論家といった感じの、上品な初老の紳士だ。繊細な風貌と女性的な物腰にも似ず、なかなか骨っぽいものを書く男だった。プリンストンの博士号を持っているという話を、鷹野はいつか聞いたことがある。

「ええ。まあ——」

と、鷹野はあいまいにうなずいた。「春の役員定期改選で機関紙部長を降りましたのでね。以前ほどじゃありません」

「ふむ」

と、論説主幹はパイプを口からはなして急に真面目な顔になった。「それは結構。ところで今日あなたに来ていただいたのは、ある特別な相談があったからです。極秘のね」

鷹野は、さっきから黙って天井を見あげている隣りの花田部長を振り返った。外信部長は、腕組みをしたまま、まあ黙って話を聞けというように、がっしりした顎をしゃくってみせた。外信部長というポストよりも、運動部長のほうが似合いそうな、体格の良い無口な男である。今日も出社した鷹野に、「ちょっと」と声をかけただけで、黙ってこの部屋に連れてきたのだった。

「相談というのは——」

と、論説主幹は軽い咳をして、さりげない口調で続けた。「あなたに、この社をやめてもらえ

まいか、ということなんです」

鷹野は一瞬、相手の言葉が信じられないというように顔をあげた。論説主幹は、それを無視して言葉を続けた。

「あなたが機関紙部長を退いたのは、組合の役員たちと意見の対立があったからだと聞いています。そうでしょうか？」

「そうです」

「あなたは、言論は無条件で自由でなければならん、と主張されたそうだ。たとえ組合の機関紙であろうと、批判の自由は犯すべきではない、指導部に反対の投書ものせろ、と」

「ええ」

「今でもその考えは変わりませんか？」

論説主幹は、澄んだ褐色の目でじっと鷹野をみつめた。短い沈黙が漂った。

「――変えろとおっしゃるんですか？」

と、鷹野は皮肉な口調で言った。「Q新聞の良心といわれるあなたが」

「それじゃ答えにならない。どうなんです？」

「変わりませんとも」

「結構です」

と、論説主幹はうなずいた。「言論と批判は、常に自由であるべきだ。いかなる体制のもとに

あろうとも、だ。私はそう信じています。あなたが私と同じ信念をかたくなに守っていることを知って、私はうれしい」

「さっきはたしかぼくに社をやめろと——」

「そう。だが、それは命令ではありません。希望、もしくは依頼といったぐいのものです。だから相談、と言ったでしょう」

「ぼくに社をやめてどうしろというんです」

「レニングラードへ行っていたきたい」

「レニングラード？」

花田外信部長が、横から無愛想な声で、

「社をやめろったって放りだそうというわけじゃない。仕事が終われば出版なりテレビなりで、ちゃんと拾ってやる、ただ。しばらく形式的に社と無関係な人間になれということだよ、わかるか」

「わかりませんね」

「説明しましょう」

と、論説主幹が言った。安楽椅子から手をのばすと、社名入りの紙袋から厚い角封筒を取り出した。「その前にお断りしておきますが、もしあなたがこの仕事をOKしなかった場合は、今日の話の内容を完全に忘れてしまつて欲しい。でないと、一人の世界的な文学者を危険な運命に追いこむことにならないとも限らないからです。いいですね？」

鷹野は黙ってうなずいた。論説主幹が冗談を言っているのではないことが、その硬い表情から読みとれたからである。

論説主幹は、ピアニストのような華奢な指先で、封筒から厚味のある書簡箋を抜きだすと、鷹野の目の前に差しだした。

「これは、ある高名な露西亜文学者から、私個人にあてた手紙です。その人が誰か、ということとは言えません。だが、私が最も尊敬しているわが国の知識人の一人だとだけ言っておきましょう。つまり、ここに書かれていることは全面的に信頼できるということです」

論説主幹はそれだけ言うと、再びパイプをくわえ、ゆったりと椅子に坐りなおした。外信部長も煙草を取りだして火をつけた。鷹野は二人にみつめられながら便箋をひろげ、達筆で書かれた文章に目を走らせた。その手紙は最初の一枚が除かれ、二枚目からはじまっていた。読みすすむうちに、鷹野は自分が次第にその手紙の内容に引きこまれて行くのを感じた。それは一種の転落感に似ていた。

へだめだ。まずいことになる」

と彼は思った。それは彼の少年時代からの逆らうことのできない性癖だった。アキレスの踵みたいなものだ。何かふつと惹かれるものを覚えると、もう前後のみさかいなくどっぷりと全身でのめりこんでしまう。組合活動にしてもそうだ。自分が政治的人間と全く反対のタイプの文学青年であることを知っていながら、ひよっとした衝動からその中のめりこんで行ったのだった。

今、その手紙を読みだしたとたんに、その不吉な予感が理由もなく彼をおそったのである。

へおれは何か厄介な仕事とかかわりあうことになる。きつとそうだ」

鷹野は論説主幹と外信部長の鋭い視線を皮膚の上に痛いほど感じながら、逆らうことのできない畏の中へ、じわじわと落ちこんで行った。その手紙には、ジャーナリストの本能をそそる危険な匂いがあった。

へ森村洋一郎宛の私信・二枚目よりへ

——かも知れません。さて、本題に入る前にお断りしておきますが、これは貴兄への依頼でもなければ、○○^{不明}でもありません。外国文学紹介を業として生きて来た一老翻訳者の個人的な懺悔と受け取っていただきたい。前述のように、小生の余命は今や、長くとも今年の秋までもてば良い方だと思われます。友人のT大医学部長は、率直にその旨を語ってくれました。この期に及んで自己が為すべきことは何か、能う限りの残務は片づけておくべきだと考えております。幸いにして妻も子も持たぬ老書生ゆえ、家庭に後顧の憂いはなく、債務もありません。学界においては偏狭といわれ偏屈者と嘲笑されておる小生ですが、仕事の面ではいささかの自負をもつて死ねます。だが、小生の生涯において唯一つ、自責の念を抱かずして想定できない記憶が残っております。この事実を知るのは、わが国においては私一人のみでありましょう。否、彼の国においても果して何人が知り得ているか、恐らく当人とその夫人以外には絶対の秘密が

守られているのではないかと推察されます。小生は偶然、その事実を確認して、その背後の余りに重い問題におびえ、外国文学紹介者としての責任を放棄しきったのでした。小生は御承知の如く、露西亜文学の翻訳・紹介を生涯の道として選んだ者です。周知の通り、露西亜文学は自由と民衆への燃ゆるが如き熱情によって彩られてきた誇り高き精神の所産であります。プーシキン、ネクラソフ、レールモントフをはじめとし、十九世紀の巨人たちから、現代ソヴェートの若き群像、ソルジェニツィン、アクシヨノフらにいたるまで、一貫して脈打っておるのは、自由への希求と民衆への愛、そして真実の為にはシベリア流刑をもいとわぬ激しいパッションです。この文学の翻訳・紹介を業とする者は、その精神をわがものとし、彼等の叫びをわが叫びとしなければならぬ事は、自明の理でありましょう。小生も五十年にわたる文筆生活において、その志を忘れず、節を屈せず生きて参りました。だが、唯一つ、自ら恥じる記憶が古いかさぶたのように胸中にこびりついて離れません。小生が世を去ればこの事実は暗黒の中に忘れ去られてしまうでしょう。小生は、日頃尊敬する貴兄に、この事実を伝え、次代への証言者としてバトン・タッチしておきたい。貴兄の友情に甘えて、この手紙をしたためる事を決意したゆえんです。

今から三年前になりますが、小生は招かれてソ連を訪れ、モスクワ、レニングラード、コーカサスなど、各地を旅行致しました。時は白夜の候、インツェリストの好青年の献身的なサービスもあって、それは忘れる事の出来ない懐しい旅となりました。たてこんだ日程の中で、或る

日、旅行社のスケジュールの爲か、半日ほどのブランクが生じたのです。小生はソチの街で図らずも自由な一夕を過すことになりました。案内者の青年を宿に帰して、小生は黒海に面した美しいソチの遊歩道を一人で散策を試みたのです。御存知のようにソチはソ連唯一の保養地で、花々と太陽と黒い瞳の乙女等に満ちた、抒情的な街です。洗練された白壁のホテルと見えたのは、労働者のためのオルジョニキーゼ記念サナトリウムと教えられました。瑠璃色の空と黒海の潮風、暮れ方の遊歩道にはチェホフの〈大を連れた奥さん〉の女主人公にも似たミセスがそぞろ歩きを楽しんでいます。老いの身にも何か爽かな血潮が高なるような夕暮れでありました。しばらく散策を楽しんだ後、小生は海に面した小高い丘の一軒の野外レストランに腰を落ちつけました。世界に名高いアルメニア産のコニャックの中でも最も芳醇なエレヴァンスキーを賞味しながら、小生はソチの旅情をしみじみと味わっていたのです。しばらくして、何気なく背後のテーブルを振り返った小生は、思わず息をのみました。そこに古い友人の顔を発見したからです。否、それは小生の錯覚でした。そこに坐って、あたりのざわめきに耳を傾けるかの如く瞑目している婦人連れの老人は、小生が全くはじめて会う人物です。しかし、その灰色の長い鬚と、鑿で彫り起したような鋭い鼻梁、固く結ばれた意志的な唇、そしてその表情全体に漂っている一種孤高な雰囲気、それらは小生が数十年前も昔から日夜親しみ敬愛してきた或る作家その人にちがいませんでした。小生は、意を決して席を立ち、能う限り鄭重な露西亜語でその人物にたずねました。その人物の名をここに明記するのはさけましょう。仮りにM——氏

と呼ぶことにします。小生はその老紳士に、「もしやM——氏ではございますまいか？」とたずねたのです。「ニエート」と、にべもない答えがはね返ってきました。小生はそこで再び勇を鼓して語りかけたのです。「私は日本の翻訳者でK——と申します。あなたの作品を長年にわたって日本の読者に紹介させていただいて参ったものでございます。翻訳という職業を離れて、私はあなたの小説を愛読してまいりました。何度かお手紙も差上げた事がございますし、御返事もいただいております。この度、訪ソいたすに当って、私はまず何よりもあなたにお目にかかりたいと思いました。作家協会のほうにも度々お願いしたのです。しかし、御病気で療養中という事で、その望みはかないませんでした。私の書齋には、十九世紀の大家と共に、あなたのポートレートが飾っております。よもや間違うはずはないと存じますが——」

「ニエート」と老人は首を振りました。そして老婦人に支えられて席を立ち、静かに薔薇のアーケードをくぐって夕闇の中へ消えて行つたのです。小生は、独りエレヴァンスキーのグラスを傾けながら、思いにふけりました。あれはM——氏ではなかったのかも知れない。異国の旅情と芳醇の酒に酔つた自分の錯覚だっただろう。すでに八時を過ぎていました。小生はホテルに帰るべく、その店を出ました。海ぞいの遊歩道へ降り立った時、小生は背後から自分の名前を呼ぶ可憐な声を聞いたのです。それは十歳前後の粗末な服を着た女の子でありました。「K——さん？」と彼女は首をかしげてきました。小生がうなずくと、「あたしについてらっしゃいな」とおませな口調で言い、すたすたと先に歩き出すのです。小生は何が何だかわからぬ

ままに、彼女の後を追いました。何かたずねようとすると、「しーっ」と指で制止するではありませんか。遊歩道を過ぎ、街を外れて坂道を登って行きます。山にそった傾斜地に、あちこち別荘の灯りが見えてきました。しばらく歩くと、少女はあたりを確めるように見回し、右手の林の中に浮びあがっている一軒の建物の灯を指さすと、「あのお家へいらっしゃい」そう言い捨てるや身をひるがえして夜の坂道を駆け降りて行つたのです。小生も六十歳を過ぎた老人です。今さら世の中に恐いものもそれほどありません。念の為にアメリカン・エクスプレスの旅行者用小切手帳だけを靴下の間に隠し、その建物に近づいて行きました。ドアをノックしようとする、扉が音もなく開き、そこに立つて微笑んでいるのは、何と、さきほどレストランで会つたあの老人の連れのお婦人だったのです。「ようこそ、K——さん」と、婦人は美しい露西亜語で囁きました。「主人がさっきから、あなたを待ちかねておりますわ」

やはりそうだったのです。小生の思つた通り、あの老人は作家のM——氏その人だったのです。その夜の一刻を、小生がいかに温かい歓待を受けて過したか御想像におまかせしましょう。M——氏はレストランでの非礼を詫びて、こう説明しました。「あなたは作家協会の公式招待者として訪ソされておられる。故にあなたの行動はすべて公的なものでなければならぬのです。作家協会が私に会うことは不可能とあなたに回答したとすれば、それは公式の回答だ。私とあなたが個人的に会うことは、官僚の掟を侮辱することになりかねない。私はそれを懸念して知らぬ顔をしたのです。だが、私は私の作品のほとんどを日本に紹介して下さっているあなたに、